

---

# 不純愛 ~ my impure soul ~

葉月 あや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不純愛～my impure soul～

### 【ZPDF】

N2834A

### 【作者名】

葉月 あや

### 【あらすじ】

この世に純愛なんて、ない。

# プロローグ

あなたのことを

こんなにスキにならなければ

あたしの口口口は

こんなに汚くならなかつたのこ

ビウして、あんたは

あの子のことを

スキになつたの?

## べだらなじ話

「俺、原田と付を合ひついでいたんだ」

ハルキは言った。

あたしの耳は、一瞬なんの音も捉えられなくなつた。

「わでしょ？」

「マジで？」

あたしは言った。

声がすこじ震えた。

平静を装つのが、こんなに大変なことなんて、

思つたことなんか、なかつた。

指の先も、足の先も、ほっぺたも、

いつきに冷たくなる。

息をするのが苦しい。

胸がどきどきする。

うわだ。

うわだって書かれてよ。

そんなのうわだって。

でも、そんなことではない。

ハルキは照れくちゅう、恥ず恥を向いた。

やめてよ。

あたしの前で。

あたし以外の女を思つて、

そんな顔、しないでよ。

「なんであたし、そんなこと教えてくれるの？」

ハルキは言葉を選びながら、口たえる。

「それはまあ、香田とまや、一応につも、つぬんでるし」

ばかじゃないの？

あたしが、あんたとつむんでるのよ。

あたしが、あんたと仲良くなりたいからって、  
ずっとそばにいたからなんだよ。

なに、深めの友情なんか、持っちゃってるの。

なんなのそれ。

ほんと、ばかみたい。

「あんたの事、スキになる奴なんかいたんだね。物好きだねえ」

ハルキの顔は、いわゆる贊否両論の顔だ。

いいと言つ人もいるし、そうでもないと言つ人もいる。

成績だつて、中の下。

取り立てて目立つタイプじゃない。

あんたを気にかける女なんて、

あたしくらいのもんだと思つてたよ。

だから、安心して、

あんたをスキでいたれたのに。



## ばかりじい話

原田みよ。

身長、推定150センチ。

ちょっと太めで、色が白い。

言つながらば、マシユマロつて感じ。

特に目立つところもなくて、

すぐには忘れられちゃうつくな

おとなしい女。

要するに、暗い女。

暗いつつのはさ、

あたしだって、人のこと

言えたもんじやないんだけどさ。

ただ。

納得いかないんだよね。

あんな女のドコがいいの？

あたしの方が、顔だつてスタイルだつて成績だつてずっとといいのに。

あたしは机に突つ伏しながら、開いた窓を見ていた。

10月になつて、風が急に冷たくなつた。

秋はスキだけど、

セピア色の空気がきらい。

意味もなく胸が締め付けられる。

人恋しくなるから。

今年の秋は、特に。

しんどい。

はやく、休み時間が終わればいいな。

寝てるふりつて、けつこう疲れる。

あたしの周りには誰もいないから。

これしかすることがない。

教室の喧騒。

笑い声。

楽しそうな声が、あたしの力を

奪っていく。

組んだ腕のなかに顔をつざめて  
しまじくすると、自分の息で

湿っぽくなってきた。

そろそろ、起き上がるうかな。

そしたら、なにじょうか。

「香田さん、具合悪いの？」

突然、上から声が降つてきた。

助かった。

そう、思つたけど、

思つたことば、語られたくない。

「ぐつに」

あたしは不機嫌な面構えで、

声の主を見た。

大野涼。

隣のクラスの男子。

しおり中うちのクラスに来て、

あたしに話しかける。

「なら、いいんだけど」

「なら、放つといとよ」

あくまで、ひとつ時間邪魔されて

気を悪くしたって、この態度は崩したくない。

ひとりでいたいから、ひとりでいる女。

女同士のこぎれいとか、グループとかに

ひとりで独立したって、この姿勢。

「なんでこつもひとりなの？」

「ひとりが楽だから」

そう言わなきゃ、あまりにも惨めじゃないの。

誰とも仲良く出来なくて、だからひとりぼっち。

そんな事実、恥ずかしいし。

あぶれる者は、欠落者みたいだし。

だからクラスメイトに、あたしが誰かと一緒にいるところを見られると、すこし気が休まる。

ひとりの、

いつまで経っても慣れないな。

大勢の中のひとりぼっちはや。

ていうか、大野がこんな質問してくるなんて

初めてだった。

あたしがいくらひとりでいても、

気にする様子なんかなく。

大野は大野の売り込みをしているものな。

もつぱり、あたしの氣でも引ひつとして。

大野はにやつと笑つた。

「なに?」

含み笑いはだしきり。

半ギレであたしが言ひ。

「べつに」

この男は、たぶん、といつか確實にあたしに惚れてい。

だから、あたしを観察することも、

往々にして、あるんだろ。

「でもや、ひとつきりじや、やつぱ寂しごつしょ?」

やつぱりバレてるんだ。

あたしが女子に嫌われてる」と。

「べつに」

あたしは廊下の方を見ながら言つた。

そつちのせつに何かあるわけじゃなくて

大野の田を見るのが、

うつとうじくなつてきたから。

うぞこ話題を振られるくらいなら

本当にひとつでこむほづが、まだマシだ。

てこづか、あたしに惚れてる奴に、

あたしが欠落者であることを

知られてるは、いい氣がしない。

「強がつちやつて」

「なにが言いたいの?」

「せつかちつすね」

あたしは立ち上がつた。

もう、無理。

踏み込んだ話題とか、

勘弁して。

「待てよ」

廊下に向かうあたしの後を、大野がついてくる。

「なんなの？」

「えいごくんだよ」

「……」

「んだよ。なぐさめてやるーと思つたのに」

「は？」

「失恋中つしょ？藤井に」

あたしは田を見開いた。

「なんで…」

「見てればわかるつつの」

あたしはキッと大野をにらんだ。

ざんざん早足になつて、家庭科室の方まできた。

人影は、ない。

「香田」

「なに?」

ああ、もつヤダヤダ。

めんどくせこな。

ひとりになりたい。

だれもいないところで

たつたひとり。

「寂しかつたら、オレのこと利用してもいいから」

ある程度、予想通りの言葉に、あたしはひとつも驚かなかつた。

こたえは明確に決まつてゐる。

お断りだ。

けど。

「考え方

そう言つて、その場を去つた。

あたしはあたし自身に嫌気がさす。

明日から、あたしのクラスに来て、

話しかける奴なんかいなくなる。

ハルキは愛身な男だ。

あたしから一も詰しかけに行こうとした。

速はなし

休み時間の少しだから逃げる理由もある。だから

卷之三

卷之三

卷之三

休み時間は

原田さんとバルギの

ふたりの時間だ。

## ばかりじこ話（後書き）

以上まで読んでいただき、誠にありがとうございました（――）  
情景の描写等、増やすべきとの有難いご指摘をいただき、精進して  
いこうと決心いたしましたが、どうでしょつ…。やつぱ少ないかな、  
描写（汗）

## 「うとう」といって話

席について、チャイムが鳴るのを待つ。  
すぐに五時間目が始まった。

あたしはため息をつきたくなつた。

今日のシメは学活。

席替え。

あたしはこのイベントが  
鬱陶しくてたまんない。

べつにドコの席に行つても  
おんなじだよ。

あたしの隣に座つた女は  
眉をしかめるし。

あたしに惚れてる男は  
必要以上に話しかけてくる。

そういう男に限つて

やたらと女子に人氣があるのが厄介だ。  
そういう男とばかり話してると  
また女たちに陰口の嵐が巻き起こる。

「香田は男好き」

ばか言つてんじゃないわよ。

男好きはみんな一緒でしょ。

下手したら

あんたたちの方が

男に飢えてるよつて見えるよ。

あたしはただ。

男に好かれるから  
そう言われるだけ。

うんざりする。

嫉妬とか。

そんな思いをぶつけられるほど。

あたしは

いい思いなんかしてないのに。  
むしろ、落ちつぱなしだよ。

あたしは先輩受けがいい。

むろん、男の。

その先輩も例に漏れず人気者だつたりする。

先輩ひとりにつきファン数名。イコールあたしの敵の数。  
男の先輩のファンは女の先輩だつたりする。  
つまり。

入学してから、ショット中呼び出し。

いつもごたごたしている。

事なきれ主義の友人たちとは  
すみやかに去つて行つた。

賢明な選択。

あたしもあの子らの立場だつたら  
おんなんじことしてた。  
ヘドが出るよ。

そんな中、大野はいわゆる『たいしたことない男』で、

だからといって

みすぼらしいわけでもない。

しかも。

大野が誰かに思われてるとか

そういう噂は聞いたことがない。

同学年だからわりとそばに来てくれる。

貴重な存在だ。

男好きの汚名は免れないけど。  
誰かの恨みを買うこともない。  
だから、奴の好意を利用して  
そばに引っ張つておきたいと  
思つてしまつ。

いつまでも続けられるもんでもないだろ? けど。  
はつきりいつて  
あたしもたいがい  
くだらない女だ。

同じ中2の、女の不良グループにも目をつけられている。  
そんなあたしと好んで一緒にいるような女なんかいない。  
なら。

噂なんか気にしないで。  
男友達ばっか作つてればいいともおもつ。  
けど。

あたしつて、空っぽなんだ。  
恋愛の好きとか  
そういう情抜きに  
相手を引っ張る魅力なんかない。  
人間的な魅力がさ。

ハルキには…。

ほんと、必死こいてキャラ作つて。  
からつぽの中身を悟られないように必死になつて  
近づいていた。  
こんなタイヘンなこと。

惚れた相手じゃなきゃ、  
とてもじゃないけど出来ないよ。

あたしはそもそも人に同調するのが  
大苦手だ。

社交辞令のひとつも言えない。

だから仮に男関係の

迷惑なごたごたがなかつたとしても  
あたしはひとりぼっちだったような気がする。

毎日顔をあわせているのに交換日記。

可愛い文字。

同じクラスなお手紙交換。

プリクラ交換。

友達の友達の顔写真なんかもらつて、  
どーするっていうの。

そういうのがよく  
わかんない。

まつたく

これはどうこうめぐらせなんだろう。

席替えはぐじ引き。

女子のほうが4人多い。

だから、女子同士が並んで座るペアが、  
2組出来る。

あたしは2年3組の生徒だ。

原田みよも2・3の生徒。

そして今、隣にいるのがその原田みよだ。

「後は自由時間だ。つむぐべあるなよ」

担任の広尾が言った。

そんなこと言つたつて、

席替えの直後。

教室はざわめいている。

広尾は時々注意して、あとは何かの書類のチェックをしていた。

あたしは。

黙っていた。

「よろしくね、香田さん」

原田みよは、そんなあたしに話しかけて来た。  
でもあたしは無視した。

こいつの声なんか聞きたくない。

そばにだつていたくないのに。

運命の女神様まで

あたしを嫌つてるのかな。

だからといつて男神だつて

味方についてるとは思えないけど。

聞こえなかつたと思つたのか、原田みよは

「香田さん、よろしくね」

と、ほほさつきの言葉を繰り返した。

あたしは田線をそつちに向けた。

原田みよは、にこつと笑つた。

近くで見ても、おとなしそうで、

ぱつとしない女。

でも、暗いという感じでもない。

と

ふと思つた。

にしても。

「変わつてゐね、あんた。

あたしと話してもいい事ないよ

むしろ悪いことばっかりだ。

あたしに向けられる嫉妬の、とばつちつとか。

「私、香田さんとはいつか話した」と思つてたの「は？」

一体、なにを言つ出すかと思えば、そんなこと。  
なんでもまた。

わけわかんないな。

「香田さんてひ、綺麗だし、頭いいし、憧れてたの」  
なにそれ。

社交辞令のつもつ？

女のほめ言葉なんか、じりじりして、虫唾がはしる。

どうでもいいけど。

あたしは、一刻もはやく  
あんたから遠ざかりたいよ。

でも。

こうして女の子と話すのは、久しぶりだったからか。  
妙に新鮮だった。

変に、気持ちが分裂している。

それから原田みよは、あたしにいくつか質問した。  
あたしはそのどれにも答えなかつた。

程なく、沈黙が落ちた。

その沈黙が、原田みよには居心地悪そうに見えた。  
だからといって、あたしから話し出す氣にもなれない。  
でも、黙つてぼんやりしてゐるのも、  
突つ伏して外界を拒絶するのも  
できない。

ふてくされたような態度で。  
ツンとして見せてるけど。

沈黙が苦手なのは  
あたしもおんなじだ。  
仕方なく、あたしは  
塾でもらつた歴史の冊子を開いた。  
かばんの中に入りっぱなしだつたんだ。

「それ、歴史?」

原田みよは言った。

「……」

「ね、小野妹子って、へんな名前だと思わない？」

「……」

「女のひとの名前みたいだよね？」

「……」

「遣唐使だつけ？」

「……遣隋使だよ」

あ。

原田みよは、にこりとした。

あたしは、なんとなく負けた気がした。

「ねえ、香田さん」

「……なに」

もう、いまさら無視するのも、  
負け惜しみみたいだから、仕方なく答えた。

「大阪冬の陣、夏の陣って

順番が逆な気がしない？

春夏秋冬なのにさ」

「べつに。冬が来たら春が来て、

つぎの夏が来るんだから自然でしょ

「そつかあ」

原田みよは思案顔で首をかしげた。

不覚にも、ちよつと可愛いと思つた。

## 他愛ない話（後書き）

「」お読みいただき、ありがとうございます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2834a/>

---

不純愛～my impure soul～

2010年10月28日03時58分発行